造山古墳群と東北アジア―榊山古墳出土品を中心に―

土屋　隆史

はじめに

本発表では、造山古墳群の中でも第１号墳である榊山古墳出土品に注目する。これらは日本列島の中で類例がなく、東北アジアからもたらされたものであった可能性が高い。これらを東北アジアにおける出土品と比較し、榊山古墳出土品の編年的位置と系譜的位置を探ることで、どのような経緯で日本列島にもたらされたのかについて考察する。

１．周辺の環境

造山古墳群の立地

２．千足古墳・榊山古墳の調査歴

・明治 45（1912）年１月１８日　千足古墳、榊山古墳が乱掘される。

・大正２（1913）年８月　帝室博物館 和田千吉氏による実地踏査。
　出土品は千足・榊山古墳のものが混在し、倉敷警察署に保管されていた。

・大正８（1919）年　和田千吉氏による千足古墳・榊山古墳の現況の紹介。
（和田千吉 1919「備中國都窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌』第９巻第 11 号）

・昭和 11（1936）年　梅原末治氏・小林行雄氏による千足古墳の墳丘・石室の測量調査。
（梅原末治 1938「備中千足の装飾古墳」『近畿地方古墳墓の調査３』）

・平成 22（2010）年～平成 26（2014）年　岡山市教育委員会による千足古墳の発掘調査。
（岡山市教育委員会編 2015 『千足古墳　第１～第４次発掘調査報告書』岡山市教育委員会）

３．千足古墳・榊山古墳出土品の来歴

・明治 32 年３月２３日の「遺失物法」により、古墳から発掘された出土品の取扱は宮内省（諸陵寮、博物館）が中心となった。

・大正６年に千足古墳・榊山古墳出土品の帰属をめぐるやりとりがあり、結果として、宮内省（諸陵寮）の所蔵となる。

＊千足古墳と榊山古墳は、ほぼ同時期に乱掘されたため、出土品の帰属には混乱がみられる。岡山県都窪郡加茂村新庄下古墳（現 岡山市北区新庄下）として保管されてきた（この住所では、千足古墳と榊山古墳の両方が該当する。）。

・現状では、千足古墳と榊山古墳の出土品を区別するのは困難（福尾 2015）。

⇒和田千吉氏が聞き取り調査に基づいて報告した際の出土品の帰属を主な根拠として、それぞれ「伝」千足古墳出土品、「伝」榊山出土品として宮内庁で所蔵されている。

＊ただ、これらが造山古墳群の「新庄下」という大字から出土したものであること

は間違いないため、やはり造山古墳群を考える際には重要な遺物。

４．古墳の概要

①　榊山古墳（安川編 2000）

・径 40mほどの円墳か。正確な形態は不明。

・出土した埴輪は造山第２古墳や作山古墳と同時期の川西編年Ⅳ期（５世紀前葉～中葉頃）に位置づけられるものとされる

②　千足古墳（岡山市教育委員会編 2015）

・墳丘長約８１ｍの帆立貝形古墳

・後円部の墳頂には２つの石室

・出土遺物からみて、時期は TK216 型式期（５世紀第２四半期頃）

５．伝榊山古墳出土の龍文透金具と多孔鈴

①　龍文透金具

用途　馬具の一種か。

材質　金銅製。

形態　縦方向の径が約５センチで、楕円形を呈する。

文様　側面には、左方向を向いた龍が２頭みられる。

製作技術

・銅の湯回り不良に起因すると考えられる途切れた部分がある。→鋳造技術

・彫りくずしによって、眼、角、口、肢が立体的に表現されている。

・耳、鱗、爪などの細部は毛彫りという切削加工の彫金によって表現されている。

→５世紀の日本列島でみられる技術的水準を超えている。

②　多孔鈴

用途　馬具

材質　金銅製

形態　丸い個体で、四方向に透かしがみられ、中に石が入る。欠損しているが、上には円形の引っ掛ける部分（鈕）がみられる。

・これらは、ともに日本列島本州には類例がみられない。

６．朝鮮半島における龍文透金具と多孔鈴の類例

①　龍文透金具

・大成洞古墳群

朝鮮半島東南部の南の端、洛東江という大河川の河口近くに位置する。朝鮮半島と日本列島の交流の拠点。３世紀中葉頃から５世紀頃にいたるまで大型木槨墓の造営が開始され、「金官加耶」という勢力の王墓と考えられている。

・大成洞 91 号墳出土の龍文透金具

共通点　左を向いた龍が２頭並ぶという共通点に加えて、頭、肢、尾の配置まで共通しており、モチーフはほぼ同じである。

相違点　形態をみると、伝榊山古墳例が楕円形に近いのに対して、大成洞 91 号墳例は円形に近く、形態としては少し異なっている。

・大成洞 70 号墳出土の龍文透金具

共通点　残存状態はあまりよくないが、２頭の龍が左向きに配置されるモチーフであるという点は伝榊山古墳例・大成洞 91 号墳例と共通している。

相違点　円形であり、伝榊山古墳例とは異なる。

・微細な形態的特徴は異なっているが、モチーフは共通している。同じ工人が作ったとまではいえないが、同じモチーフを用いる文化圏のものであったと考えられる。

②　多孔鈴

・大成洞 91 号墳出土の多孔鈴

用途　馬具の繋に装着される装飾。

形態　鈴が台形に近く、方形の透かし孔が４つみられる。笠形の金具とセットで使われる。

相違点　伝榊山古墳例には大成洞 91 号墳例のような笠形金具はみられない。鈴の胴体は、大成洞 91 号墳例が台形に近いのに対して、伝榊山古墳例は球形である。また鈕の形も少し異なっている

・共通性が多いとはいえないが、同じ文化圏で製作されたものであると考えられる。

７．中国大陸における龍文透金具と多孔鈴の類例

①　龍文透金具

類例　遼寧省の北票市にある倉粮窖墓、西構村採集品、河南省の安陽市にある孝民屯 154 号墓（４世紀中葉頃）出土例。

社会的位置

これらは、中国の三燕といわれる勢力の墓であったと考えられている。三燕とは、中国北部の五胡十六国時代（３世紀末から５世紀中葉頃まで）に鮮卑族の慕容部が前後して建国した前燕（337 年建国）、後燕（384 年建国）、北燕（409 年建国、436 年滅亡）を指す。

共通点　円形で上に方形の透かしがある点はよく似ている。

変遷案　龍文の形骸化という方向で型式変化したとすると、「伝榊山古墳・大成洞 91 号墳・大成洞 70 号墳→倉粮窖墓→孝民屯 154 号墓（４世紀中葉）・西溝村採集品」伝榊山古墳例は、４世紀第２四半期頃のものか（前燕）。

②　多孔鈴

類例　中国遼寧省（三燕）、吉林省（高句麗）など、東北アジアで広くみられる。

時期　紀元前後頃からみられ、三燕・高句麗では４世紀中葉頃からみられる。

形態　多孔鈴には様々な形があり、時間的変化や地域性についてはまだよくわかっていない。伝榊山古墳例と最も形態が類似しているのは、吉林省の老河深遺跡中層 67 号墓遺跡出土例であるが、これは紀元前後頃のものであり、直接的な関係性は想定しにくい。現状では、多孔鈴が多く出土するようになる４世紀中葉頃の前燕のものと考えるのが妥当か。

③ 小結

伝榊山古墳出土の龍文透金具と多孔鈴は、分布状況やモチーフの共通性からみて、中国東北部の前燕で製作された可能性が高い。

８．伝榊山古墳出土の馬形帯鉤

①馬形帯鉤とは

朝鮮半島南部で紀元前１世紀頃から４世紀後半頃にかけてみられた、馬の形の金具。多くは銅製。出土状況からみて、腰の帯に着装されたものと考えられる。

点数　６点が出土。

系譜　中国の琵琶形帯鉤の影響をうけて出現したものか。

製作技法

蠟でつくられた原形を、二枚の土製の鋳型の間にいれて、銅の湯を流し込んで製作された鋳造技法と想定される。

分布域　朝鮮半島南部の東南部と、中西部に多く分布しており、二大分布圏とされている。

この両地域にみられる馬形帯鉤は、特徴に違いがみられる。

地域性（朴章鎬 2011）

朝鮮半島東南部地域出土品

・陰刻文様（蜜蝋原形に文様を刻む）。

・紀元前１世紀～紀元後２世紀にかけてみられる。

朝鮮半島中西部地域出土品

・陽刻文様（鋳型に文様を刻む）。

・紀元後２世紀～４世紀後半にかけてみられる。

・東南部地域の影響を受けて出現した可能性が高い。

②伝榊山古墳例の特徴

系譜　陰刻文様があるもの―東南部地域に由来するか。

文様がないもの―東南部、中西部の両方で確認される。

編年的位置

東南部地域で馬形帯鉤が確認されたのは紀元前１世紀～紀元後２世紀頃まで。伝榊山古墳の年代である５世紀とは大きな時間差がある。

９．榊山古墳に至るまでの移入経路

・榊山古墳から採集された陶質土器―金海地域加耶土器（金官加耶）と類似（白井 2000）。
・龍文透金具、多孔鈴、馬形帯鉤はいずれも大成洞古墳群から出土している。
・朝鮮半島南部の金海地域（金官加耶）を経由してもたらされたか。
・金官加耶は３世紀以降、日朝交流の窓口となっていた場所。
・龍文透金具・多孔鈴―４世紀中葉頃
　馬形帯鉤―２～３世紀頃
　　⇔榊山古墳の築造時期―５世紀頃
・榊山古墳へもたらされるまでに、どこかの地域で長期間保有されていたか。
　それが中国・朝鮮半島であるか、日本列島（畿内地域、岡山地域など）であるかは確定
　することができないが、背景に何らかの特殊な事情があったと考えられる。

まとめ

・伝榊山古墳出土の龍文透金具と多孔鈴は、分布状況やモチーフの共通性からみて、中国東北部の前燕（４世紀中葉頃）で製作された可能性が高い。
・馬形帯鉤は朝鮮半島東南部（２世紀）で製作されていたか。
・これらは金海（金官加耶）を経由してもたらされたか。
・どこかの地域で長期保有されていた可能性。

参考文献

（日本語）
諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣
岡山市埋蔵文化財センター編 2016『超巨大古墳の時代～吉備の至宝・千足古墳、榊山古墳出土品の里帰り展～』
風間栄一 2006「馬形帯鉤の分類と系列把握」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館、pp. 145-164
九州国立博物館 2010『馬　アジアを駆けた二千年』
後藤守一・相川龍雄　1936「多野郡平井村白石稲荷山古墳」『群馬縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第３輯
島崎東 1981「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』第３号、岡山県史編纂室、pp. 96-104
白井克也 2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器―新石器時代から統一新羅時代まで―」『日本出土の舶載陶磁』
土屋隆史 2015「附章２　伝榊山古墳出土の龍文透金具と鈴について」『千足古墳　第１～第４次発掘調査報告書』岡山市教育委員会　pp. 158-168

徳田誠志・清喜裕二・有馬伸・加藤一郎・横田真吾・土屋隆史 2015「附章２　１　宮内庁書陵部所蔵の千足古墳関係出土品報告」『千足古墳　第１～第４次発掘調査報告書』岡山市教育委員会
奈良文化財研究所 2004『三燕文物精粋（日本語版）』
奈良文化財研究所飛鳥資料館 2009『北方騎馬民族のかがやき　三燕文化の考古新発見』
新納泉編 2012『岡山市造山古墳群の調査概報』科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書
西田和浩編 2015『千足古墳　第１～第４次発掘調査報告書』岡山市教育委員会
福尾正彦 2006「宮内庁書陵部保管の馬形帯鉤について―出土地等の再検討―」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館、pp.121-134
福尾正彦 2015「「新庄下古墳」の出土品―宮内庁書陵部所蔵の経緯を中心に―」『千足古墳　第１～第４次発掘調査報告書』岡山市教育委員会　pp.127-136
水科哲哉・松前圭子・熊坂多恵編 2013『ビジュアル版 楽しくわかる韓国の歴史 VOL.2　百済の美を求めて』株式会社キネマ旬報社
安川満編 2000『造山第 2 号古墳　付　伝・千足古墳出土遺物』岡山市教育委員会
柳本照男 2016「海を渡った馬形帯鉤」『塚口義信博士古稀記念　日本古代学論叢』和泉書院、pp.237-249
早稲田大学會津八一記念博物館編 2010『穴澤咏光氏寄贈東洋考古学資料目録』
（韓国語）
慶星大学校博物館 2003『金海大成洞古墳群Ⅲ』（慶星大学校博物館研究叢書第 10 輯）
金ソンウク 2010『韓半島馬形帯鉤の編年と地域相』高麗大学校碩士学位論文
朴章鎬 2011『原三国期 動物形帯鉤の展開と意味』嶺南大学校碩士学位論文
朴章鎬・洪技豪 2018「馬形帯鉤の製作復元実験について」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』12 号、アジア鋳造技術史学会、pp,42 -44
大成洞古墳博物館 2011『金海大成洞古墳群 -68 号墳~72 号墳-』（博物館学術叢書第 10 冊）
大成洞古墳博物館 2013『東アジア交易の架橋　大成洞古墳群』大成洞古墳博物館 10 周年記念特別展示会
大成洞古墳博物館 2015『金海大成洞古墳群 -85 号墳~91 号墳-』（博物館学術叢書第 15 冊）
韓国考古環境研究所 2010『燕岐鷹岩里カマゴル遺跡（A 地区）』
（中国語）
吉林省集安県文物保管所　1982「集安万宝汀墓区 242 号古墓清理簡報」『考古與文物』1982 年第６期、陝西人民出版
吉林省文物考古研究所　1987『楡樹老河深』文物出版社
遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽県文化館 1984「朝陽袁台子東晋壁画墓」『文物』1984 年第６期、文物出版社

遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽十二台郷磚廠 88 M1 発掘簡報」『文物』1997 年第 11 期、文物出版社
遼寧省文物考古研究所編（奈良文化財研究所訳）2004『三燕文物精粋』遼寧省文物考　古研究所・奈良文化財研究所
孫国平・李智 1994「遼寧北票倉糧窖鮮卑墓」『文物』1994 年第 11 期、文物出版社
田立坤 1991「三燕文化遺存的初歩研究」『遼海文物学刊』1991 年第１期、《遼海文物学刊》編輯部
田立坤 2002「袁台子壁画墓的再認識」『文物』2002 年第９期、文物出版社
田立坤・李智 1994「朝陽発現的三燕文化遺物及相関問題」『文物』1994 年第 11 期、文物出版社
中国社会科学院考古研究所安陽工作隊　1983「安陽孝民屯晋墓発掘報告」『考古』1983 年第６期、中国社会科学院考古研究所

図面出典

第１図、２図：筆者実測（宮内庁書陵部蔵）

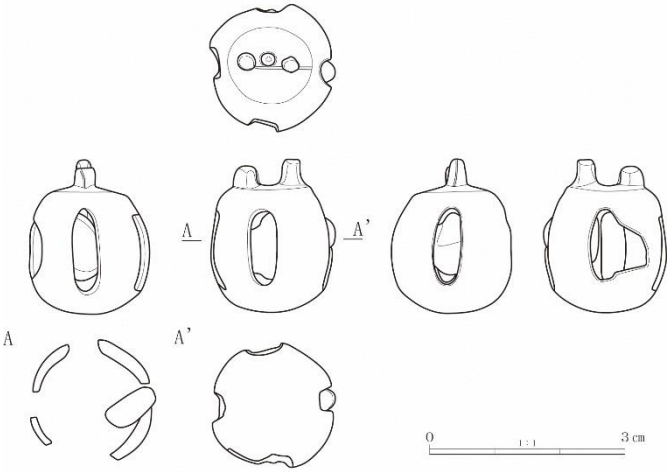
第３図　１：（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983）を再トレース、２：（田立坤ほか 1994）を再トレース、３：（孫国平ほか 1994）より、４：（大成洞古墳博物館 2015）より、５：（大成洞古墳博物館 2011）より、６：筆者実測（宮内庁書陵部蔵）

第４図　１：（吉林省文物考古研究所 1987）より、２：（吉林省集安県文物保管所 1982）より、３：（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983）より、４～７：（遼寧省博物館文物隊ほか 1984）より、８：（遼寧省文物考古研究所ほか 1997）より、９・10：（田立坤ほか 1994）より、11 ～ 13：（大成洞古墳博物館 2013）より、14 ～ 16：筆者実測（余市町教育委員会蔵）、17：筆者実測（京都大学総合博物館蔵）、18：（後藤・ 相川 1936）より、19：　筆者実測（宮内庁書陵部蔵）

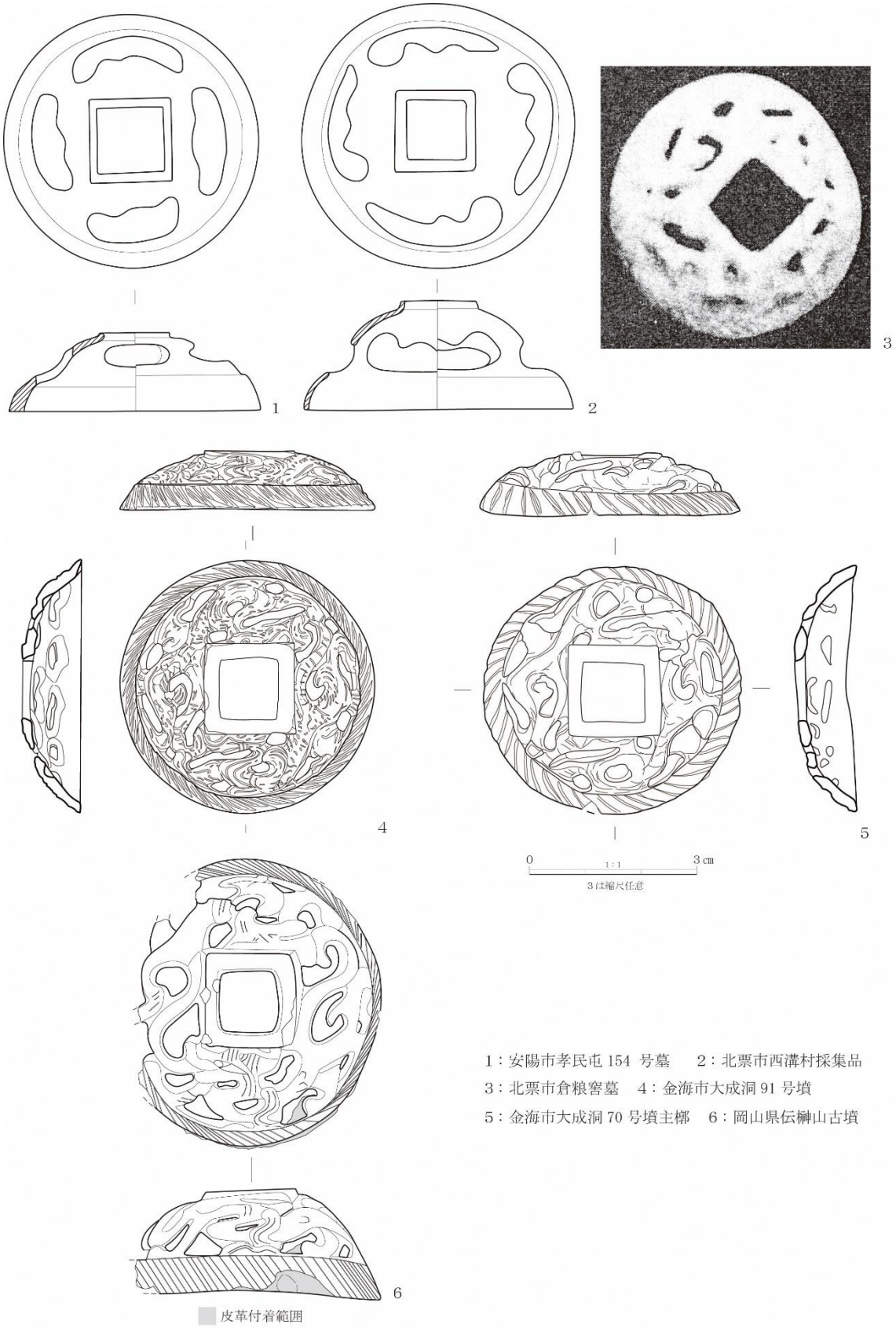
第５図　有馬伸ほか 2015 より

第６図　朴章鎬 2011 より

第１図　伝榊山古墳　龍文透金具

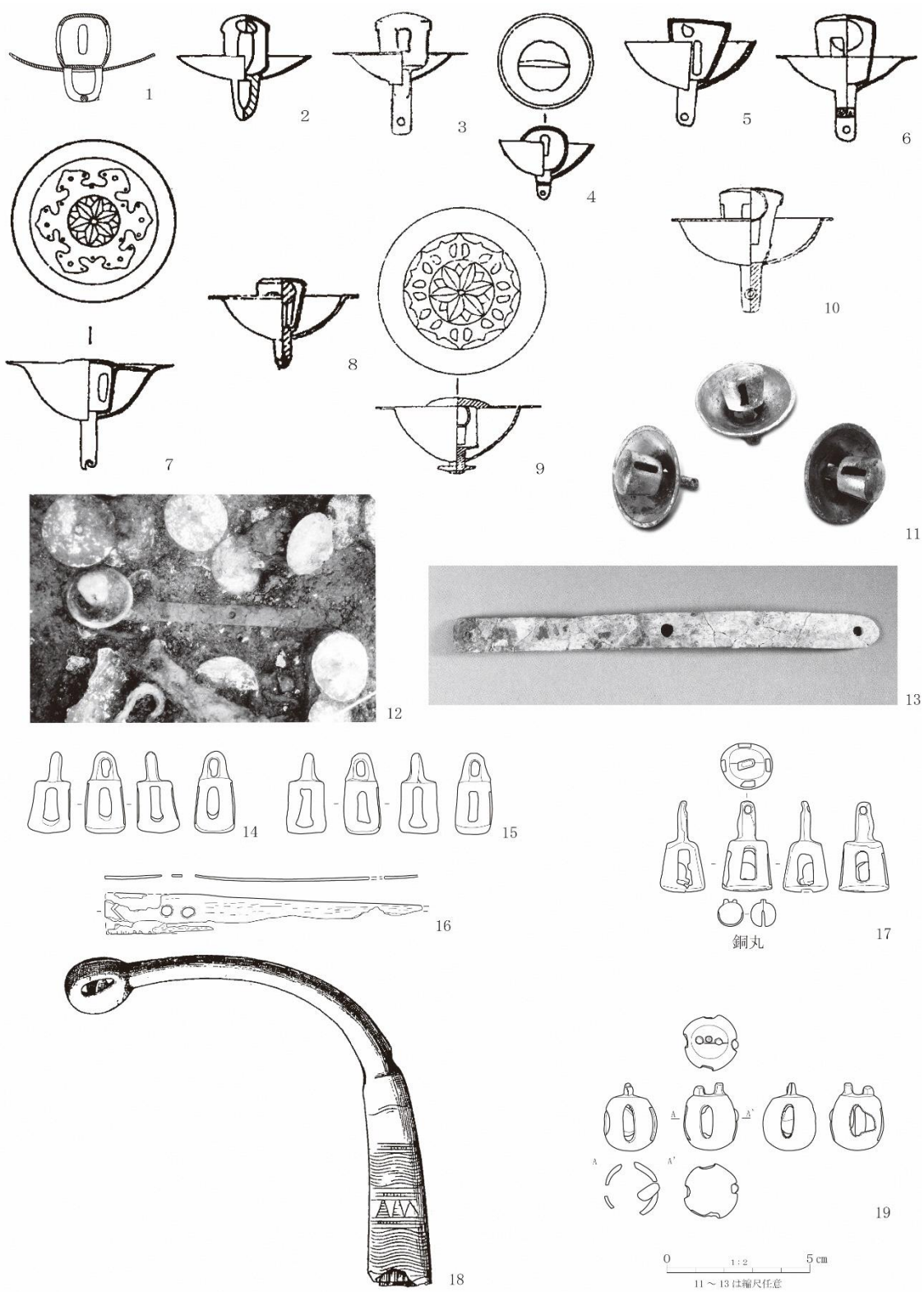


第２図　伝榊山古墳　多孔鈴



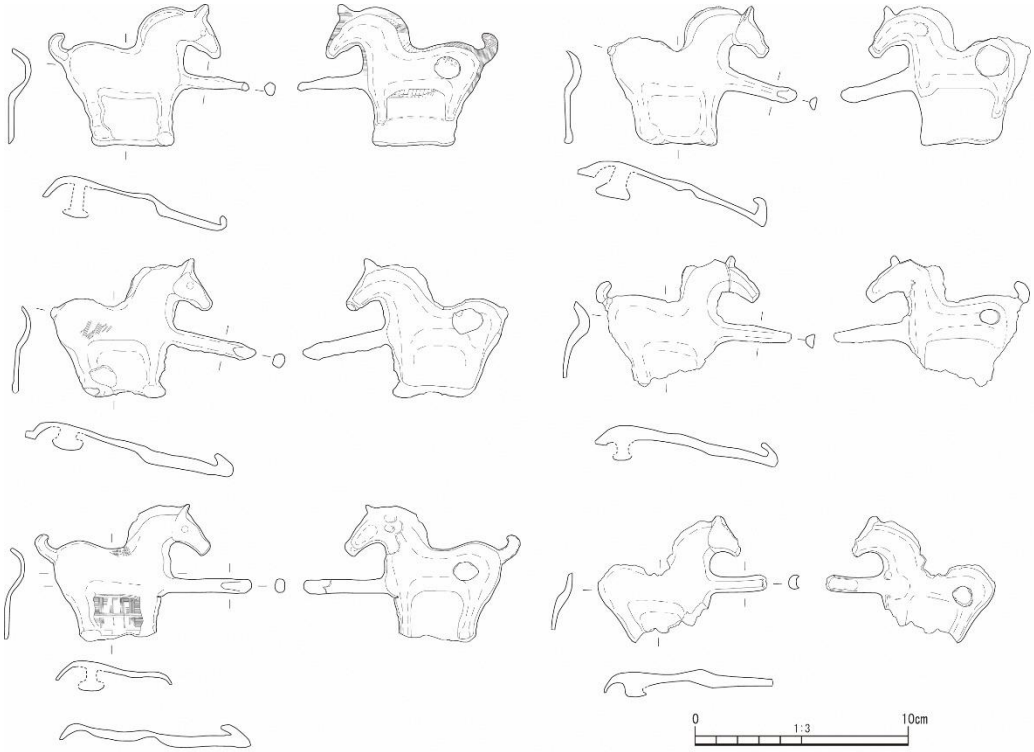
1：安陽市孝民屯 154 号墓　2：北票市西溝村採集品
3：北票市倉粮窖墓　4：金海市大成洞 91 号墳
5：金海市大成洞 70 号墳主槨　6：岡山県伝榊山古墳

第３図　龍文透彫金具の諸例

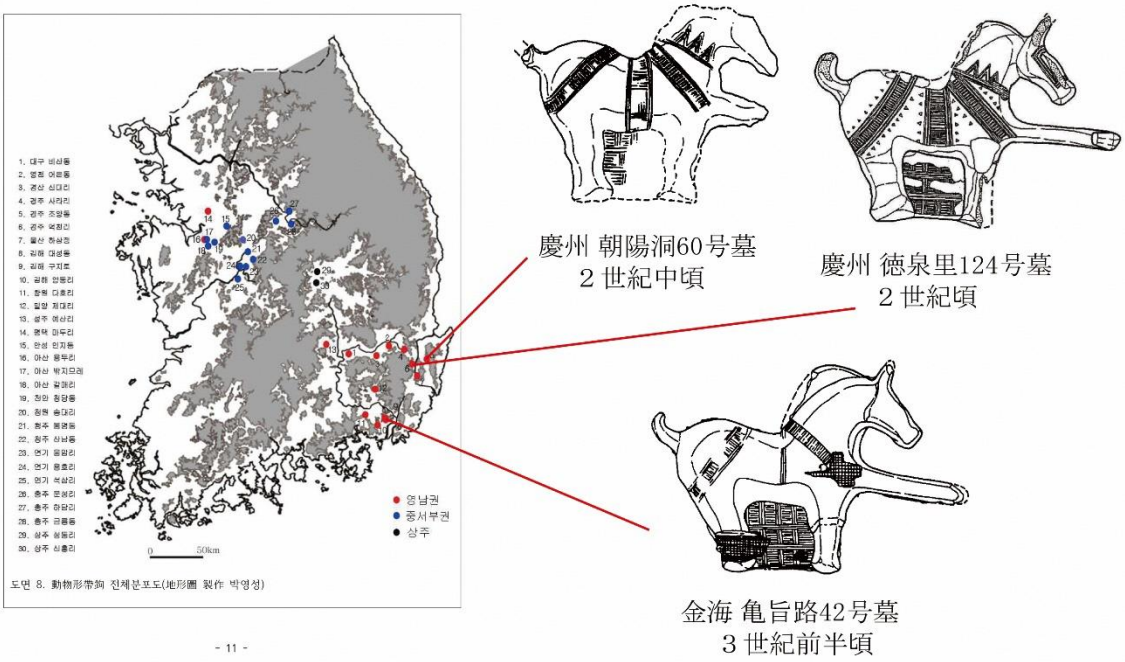


1：吉林省楡樹県老河深遺跡中層 67 号墓遺跡　2：集安市万宝汀 242-1 号墳　3：河南省安陽市孝民屯 154 号墓
4～7：朝陽市袁台子壁画墓　8：朝陽市十二台郷磚廠 88 M1 号墓　9：北票市西溝村採集品　10：北票市喇嘛洞村採集品
11～13：金海市大成洞 91 号墳　14～16：北海道大川遺跡 GP50 土壙墓　17：京都大学総合博物館所蔵品
18：群馬県白石稲荷山古墳西槨　19：岡山県伝榊山古墳

第４図　多孔鈴の諸例



第５図　伝榊山古墳出土の馬形帯鉤



도면 8. 動物形帶鉤 전체분포도(地形圖 製作 박영성)

第６図　馬形帯鉤 「一部に陰刻文様があるもの」の系譜